



残暑 COVID-19 禍

お見舞い申しあげます。

還来生死輪転家

(生死輪転の家に還来することば)

決以疑情為所止

(決するに疑情をもって所止とす)

おんない

恩愛はなはだちがたく

しんじ

生死はなはだつきがたし

ねんぶつざんまいぎょう

念仏三昧行じてぞ

さいしやう

罪障を滅し度脱せし

高僧和讃 龍樹讃』

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒二二一〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL 〇三―五二四二―二〇二五
FAX 〇三―五二四二―二〇二六
HP shousanji.com



お寺の裏側に咲いているノリシユロの葉を飾って
みました。お仏華にも活用できるかなあ。

残暑厳しい折り、また新型コロナウイルスの渦中、ご心労、ご心痛が続いておられることと拝察申しあげます。とともに、何卒、ご無理のないようお過ごしただきたく存じあげます。

八月のお盆が過ぎたかと思えますと、秋のお彼岸が近づいて参りました。一般には、お盆にお墓参りして、また、お彼岸にお墓参りするようですが、その違いは何なのでしようか。

お盆は亡くなったご先祖が帰ってくる期間だから、お墓に参ってお迎えし、おもてなしをして、あの世へ帰っていただく。

お彼岸は、ご先祖が眠っておられるお墓に参り、感謝の念を持って、お掃除をして、お供えをする。どちらも「先祖供養」の一貫と捉えられているようですが？仏さま「覚った方」とは思えてないようです。

お彼岸は、「到彼岸」と言って、修行をして悟りの世界に生まれることを言います。それは言い換えると、私が自力で願います。浄土に往生することですが、浄土真宗では、お浄土に至らせ、仏（悟り）に成らせるのは、阿弥陀さまのひとりばたらき（本願他力）と味わっております。

一方、お盆は、先人が仏さまと成って帰って来ると言うことであれば、お浄土から仏さまとなって私どもの世界に還って来て、仏さまとしてのはたらきをされると言えるかと思えます。そして、そのはたらきも阿弥陀さまのひとりばたらきと浄土真宗では味わっております。

しかしながら、先人が仏さまとしてはたらくてくださっているとはなかなか味わえないでいるのが、私たちであるようです。

つまり、どうしても、生前の先人から受けたご恩や愛情、それに対する自身の情（おもい）が断ちきれず、私のころころの中で、私の情が、亡き方をこちらに帰らせよう、帰らせているように錯覚してしまっているのではないでしょうか。

でも、「恩愛はなはだ絶ちがたい」「生死はなはだ尽きがたい」「阿弥陀さまのご本願を信じがたい」「私たちがだからこそ、その情（ごころ）をそのまま温かく包んでおられるのが、阿弥陀さまなのです。」

お盆は、阿弥陀さまの「還相回向」のはたらきを味わうご縁であり、お彼岸は、阿弥陀さまの「往相回向」のはたらきを味わうご縁と受け取っていただけたらと思います。

また、この私がお浄土に往生して「往相回向」、仏と成って、この世に還り、仏のはたらきを行う「還相回向」の順ではなく、この私を仏にしようと、二つの回向は同時に、そして常に、はたらいっているのではないかと思えるのです。

春彼岸で、往相回向を味わい、お盆（新暦・旧暦）で還相回向を味わい、秋彼岸でまた往相回向を味わいを繰り返しましょう。

浄土の道は 浄土から開かれている

金子大栄師

旧暦のお盆 盂蘭盆会



八月十六日（丑）、のんのん法話会に併せて「盂蘭盆会」法要を行いました。白墨が無かったので、朱墨で書いて、乾かないうちに掲げたら、どこぞのおぼけ屋敷の看板みたいになってしまいました。この日は高橋八重子さんが、ご参拝くだ

さいました。二人で阿弥陀経を誦読して、少しお話をしてみました。

暑い中、お参りいただき、ありがとうございます。

六月二十八日に、永代経法要を営みましたが、七月に入って、池田さんより、お参りできないからとご懇志をお送りくださいました。

また、七月の新暦のお盆にご自宅で出来なかった福富家さま・池田家さまより、また八月旧盆にお参り予定でありました桐生家さまよりご懇志をいただきましたこと、誠にありがとうございます。

八月八日には、藤井家初盆法要を院内で、十五日には、中木原家初盆法要をご自宅ですとめさせていただきました。十五日は午後より、横浜より竜野さん母娘さんが、お盆参りに来てくださいました。

今夏のお盆法要は、内勤外勤また他寺院さまのお手伝いも少なかったです。

八月中の第二波も峠を過ぎた感がありますが、また秋から冬にかけて第三派がありそうな気がしますから、どうぞ、引き続き不要不急の外出はお避けください。

寺院としても、いつか終息するだろうという思いで、いざれ会えるでしょうだけではなく、今、何が出来るか模索しながら、秋のお彼岸会をお迎えして参りたいと思っておりますが・・・

感染症と差別

～ハンセン病差別を通して～ II

登尾唯信 同和教育振興会評議員

人間同士を分断する差別心

今回の新型コロナウイルス感染問題についてハンセン病差別問題を通して見えてくる問題は何であろうか。

一つには感染経験者に対する蔑視、嫌悪感である。マスメディアを通して流される感染した著名人の会見の中でしばしば謝罪の言葉が出る。これでは、感染するのが悪いことだということになってしまい、新型コロナウイルスに感染していることを隠して、さらに感染させてしまうことにもなりかねない。

感染症に対する恐怖心、感染したくないという心情は誰にでもある。しかし、縁次第では、誰でもかかり得るといふ視点が大事だと思う。いわゆる当事者性への理解である。

また退院した回復者についても偏見・差別が続くことになる。ハンセン病差別と通底する問題である。自分も感染するかも知れないという恐怖感が感染経験者を忌避し、さらに医療関係者まで差別することに。忌避すべきはウイルスであるのに、

感染経験者や医療関係者の人権を踏みこじって、差別心が人間同士を分断してしまっている。差別心がある。それは具体的には死に対する恐怖心である。仏教は老病死の解決、生死すべき道を説いてきた。となると今回の新型コロナウイルス感染問題は仏教の課題でもある。人間を分断しない道を教えているのが仏教であることを再認識したい。

根絶できない感染症

忌避すべきウイルスであるが、ウイルスと人間は共生せざるを得ないという専門家の意見もある。感染症を完全に撲滅することはできない。宿主である人間が存在する限り、さまざまな感染症は存在し続ける。人間も生態系の中の一員であるからである。まさに仏教の説く縁起的 相依相関関係)である。天然痘のウイルスのように消えていくものもあり、新たに出現するウイルスもある。様々なウイルスの存在は、それに伴う感染症も時に応じて出現するということである。文明の進展に伴って感染症も随伴してくることを私たちは覚悟しなければならぬ。

当事者性と想像力

そこで必要なのは誰もが感染しうるといふ当事者性の理解であり、釈尊の言われる「己が身にひきくらべて」という、感染経験者が差別忌避されることについての想像力が必要だと思う。自分が感染したとして、忌避されることへの痛み、不安への洞察が必要である。

当事者性への理解と想像力が感染経験者と非感染者という構図を外す行為に繋がると思う。本来、水平、平等な存在であるはずなのに、感染していない人を「私たち」、感染経験者を「あの人たち」と分けて、「括りにしてしまおう」思考が問題である。例えば、二県にまたがった商圈があって、感染経験者の少ない県へ他県からの買い物客があった。他県の車のナンバープレートを見て、その車に生卵が投げつけられるということが起こった。あの人「は」と「括りにして、その人が感染していないにもかかわらず拒否、差別するのである。

感染経験者や医療従事者への差別は、その現状を知らない、あるいはその人々を知らないことで起こる。逆に、感染経験者の名前や住所まで特定し、差別する。しかし、「私たち」も「あの人たち」も同じ人間であり、老病死する存在である。「あの人たち」も「私たち」である。念仏を申し生きていることは、この感染経験者と非感染者という構図を外す行為であろう。

念仏者の課題

今回の新型コロナウイルス感染問題では都道府県によって寺院の置かれていた状況が違っているので一概に言えないが、あらゆる法座が止まっている場合が多い。寺院が感染源になってはという思いがある。しかし、寺院・僧侶の側が自粛ムードに、過度に受け身になっていないだろうか。法要の中啓やウェブ会議など、創意工夫されている最中である。同時に、寺院・僧侶は新型コロナウイルスの終熄を願うだけの存在でよいのだろうか。今、それぞれの場で、新型コロナウイルス感染差別についての啓発活動も必要だと思う。

公益社団法人日本心理学会の特設ページ「新型コロナウイルス COVID-19」の「19) 関わる偏見や差別に立ち向かう」原文 Combating bias and stigma related to COVID-19 アメリカ心理学会のHP) は心理学者向けのサイトであるが、大変参考になるため、一部略記する。詳細はサイトで確認願いたい。

○ 事実」を広める

正確な情報がないと人々は偏見やステレオタイプ（固有観念）の影響を受けやすくなる。

○ 社会的に影響力を持つ人々を巻き込む

適切な情報伝達の模範例となり、伝染

病を特定の地域や集団と結びつける取り組みをやめさせる上で、大企業のリーダーや議員、著名人、宗教指導者などの役割は大きい。

○ 感染経験者の声を広める

新型コロナウイルスに感染してもほとんどの人は回復する。経験者の声を聞くことで、一般市民は安心を得ることができる。また、現場で働く医療従事者をたたえることで感染経験者への批判や偏見を減らすことができる。

○ 根拠のない話、うわさ、ステレオタイプを正し、偏見を助長する言説に異議を唱える

事実とうわさを峻別する。

この中、「宗教指導者」の役割が大きいと指摘されていることが注目される。

教団、僧侶がこの現実の中で、感染するかもしれない自分ということも前提に、他者と、そして感染経験者とも興隆し、発言して行くことが必要と考える。見て来たように私たちは、宗教者として穢れ観や業病を説き、ハンセン病差別を温存助長した。林氏の「憤り」は国家に対して、同時に宗教者に対しても向けられている。

刻々と変わる新型コロナウイルスについての情報を取捨選択しつつ、事実を迫り、一人ひとりが尊重される社会、御同朋の社会への道を門信徒や社会と共に歩み、その

情報を発信する必要があるのではないか。僧侶、教団の社会的責任が問われているような気がする。

登尾唯信氏 略歴

宮崎教区宮崎組松尾寺住職

本願寺派布教使

一九四九年生まれ

一九七七年龍谷大学大学院修士課程修了

数年前、鹿児島島の稱讚寺に布教にご出向くださいました。

参考・引用文献】

- 『交からの手紙 再び「癩者」の息子として』 林力著（一九九七年）
- 『ハンセン病史と新型コロナウイルス』 酒井義一寄稿 仏教タイムス 二〇二〇年五月（四日号）
- 『感染症と文明―共生への道』 山本太郎著（二〇二〇年）
- 日本心理学会特設ページ

https://psych.or.jp/specialcovid19/combating_bias_and_stigma/

（宗報）2020年7月号より）

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の生涯とその思想 【二〇七〜二三二】

関東での布教

今井雅晴

親鸞は四十二歳のとき、妻恵信尼や子どもたちとともに越後から関東に移った。以後二十年間近く、常陸国を中心とする関東において念仏布教に励み、多くの門信徒（門徒）を獲得した。また自身の信仰の境地も深め、主著となった『教行信証』きょうぎょうしんじょう 正式には『顕浄土真実教行証文類』けんじょうじゆんじつぎょうぎょうしんじょうもんるい という）をまとめた。親鸞の関東での活動は、門徒の人びとにとっても、また親鸞自身にとっても大きな意義がある。本稿ではその意義について考えていきたい。

越後での生活

東国に移るまでは、親鸞は朝廷からの流罪によって七年間を越後で過ごしていた。越後に流されたのは親鸞三十五歳の二月であった。すでに京都で結婚していた妻の恵信尼も同道した。かつて恵信尼は越後の豪族の娘であるという説

が強かったが、おそらくそうではない。恵信尼は京都の中流クラスの貴族三善為教（為則）の娘であって、彼女は京都で親鸞と結婚したとみるべきである。

朝廷の規則（養老律令「極令」）によれば、流人の妻は流刑地に一緒に下らなければならなかった。恵信尼はこの規則に従って夫親鸞とともに越後に下ったと考えられるのである。

また親鸞が流される直前の一月、伯父の日野宗業が臨時の除目によって越後権介に任命されている。これはおそらく親鸞が越後へ流されるとの情報を得て、流刑地での親鸞を守るために、朝廷の有力者に頼み込んで越後権介に任命してもらったと推定できる。流人を関係者が守ることはよくおこなわれていた。

すでに越後介もいることではあるし、貴族の慣行に従い、実際には任地に赴任しない遥任であったであろう。ただそれにしても現職の国司の権威は、とくに国府においては、絶大である。その甥夫婦であつてみれば、親鸞と恵信尼の安定した生活は保障されていたにちがいない。

従来、親鸞の越後での生活は経済的に苦しかったという見方が一般であった。しかし、その見方は改められるべきである。親鸞の苦しさは経済生活ではなく、法然やその門下の仲間と離れて一人で信仰生活を送らなければならぬことであつた。妻の恵信尼がいるとはいっても、恵信尼はまだ尼でもなければ修行者でもない。信仰はあくまでも親鸞個人の課題として解

決し、前身していかなければならないことであつた。

流罪後五年近くたって親鸞には赦免の知らせが来た。しかし親鸞は京都へは帰らなかった。それから二年あまりたってから、家族とともに関東をめざしたのである。京都へ戻らなかった理由については、師匠の法然が亡くなつてしまったので戻る意味が薄れたのだからという説がある。また、いや実際には京都に戻り、それから家族で関東をめざしたのだろうという話もある。

しかし親鸞が自分の信仰の境地を深めるために、そして念仏布教のために関東をめざしたことはまず間違いあるまい。

越後から関東へ

親鸞が関東に同道したのは、三十三歳の妻恵信尼と、四歳の息子信蓮房である。そして信蓮房より三歳ほど年上であろう娘の小黒女房である。いずれも数え年であるから、満年齢なら小黒女房は五歳から六歳、信蓮房は四歳か五歳である。このような幼児や貴族出身の妻を同道するからには、関東にはきちんと迎えてくれるところがあつたと考えねばなるまい。それであれば恵信尼が関東行きを同意するはずもなからう。

関東で親鸞一家が長いあいだ住んだのは、常陸国笠間郡稲田である。ここは下野国南部の大豪族宇都宮頼綱の領地であつた。かれは法然

毎月 親鸞聖人を知ろう」を掲載します 親鸞聖人が生きた時代の社会のあり方などを通して親鸞聖人の生涯を訪ね少しでもその遺徳を感じられたらと思います

の有力な俗弟子で、法名を実信房蓮生と称していた。親鸞の五歳年下で、京都の貴族社会に出入りしていた。和歌で有名な藤原定家の息子為家の妻は、頼綱の娘である。

頼綱が法然門下の俊秀親鸞を知らないはずはない。その親鸞が関東をめざすと聞き、頼綱は自分の領地稲田に招いたと推定される。では稲田とはどのようなところであったのか。その前に、いままで関東の親鸞といえは、関東の荒野に一人立つ親鸞」というイメージが強かったことについて再検討してみたい。

日本全国六十六か国は、農林水産業の豊かな順に四種類に分けられていた。いわば年貢収入の多い順である。それは上から下へ大国・上国・中国・下国であった。大国は豊かでよい暮らしができたといえる。そしてなんと常陸国は大国であった。南隣りの下総国も大国である。これだけ見ても、関東は荒野である」などとはいえまい。それはあとから作られたイメージなのである。

さて稲田についてである。親鸞の稲田草庵の跡という西念寺の北、三、四百坪のところに稲田神社がある。この神社は古代から存在していた。平安時代の『延喜式』には、全国の有力神社の一覧がある。それらの神社は大社・中社・小社の三段階に分けられていた。大社のなかでも大勢力の神社は明神大社として最高位に格づけられていた。稲田神社は、この明神大社であった。

鎌倉時代のなかば、親鸞が亡くなってからま

もなくの時期に作成された、常陸国全部の田の面積を記した「一覧表 (弘安の大田文)」によれば、稲田神社は十七町あまりの田を所有していた。当時一町は三千六百坪なので、十七町は現在の表記に直せば二十万平方メートルあまりとなる。これ以外に広大な畠や山林、そしてそれらを守る僧兵がいたにちがいない。稲田神社は大勢力を誇っていたのである。

また稲田は交通の要地でもあった。南から北へ抜ける幹線道路の宿場町で、古代から大神の馬家」として知られていた。

このように見てくると、親鸞伝絵」(御伝鈔)に、

聖人 中略)笠間郡稲田郷といふ所に、隠居したまふ。幽棲を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を閑といへども貴賤衢に溢る。

親鸞聖人は笠間郡稲田郷というところに隠れ住まわれました。ひっそりと住んでいたのに僧侶や俗人が訪ねて来て、身分の上下を問わず大勢の人たちが道路にあふれました」と、という文章から浮かぶように、稲田は人里離れたうらぶれたところであったというイメージも改めなければなるまい。稲田はにぎやかなところだったのである。

東国での布教活動

では親鸞は関東においてどのような活動をしていたのであろうか。これも従来、親鸞は念仏も知らぬ無知蒙昧の人びとに念仏を伝えに来た」というイメージがあった。しかし関東は未開の地ではない。念仏やその他 法華経」、観音菩薩の信仰など、関東の人びとが知らなかったはずはない。いずれも日本中にひろまっている。念仏は京都の貴族の独占物ではない。ただ、関東でひろまっていた念仏と親鸞の念仏とはその内容が異なっていたということなのである。

親鸞伝絵」に、

聖人常陸国にして、専修念仏の義をひろめ給ふに、おほよそ疑謗の輩はすくなく、信順の族はおほし。

親鸞聖人が常陸国で専修念仏の教えをひろめると、だいたいにおいてその教えを疑い謗る人たちは少なく、信じ従う人たちが多かった」とある。いかにもたやすく親鸞が説く念仏がひろまったかの印象を受ける。

しかし親鸞が説く念仏が「一挙に関東にひろまったか」というと、そうではあるまい。関東の人びとはすでに信仰をもっている。外の世界から来た人はいきなり「この念仏が正しい」この念仏がほんとうの信仰だ」といわれても、拒絶反応を示すのが普通であろう。それを乗り越えるためには、親鸞が自分の人間性を関東の人びとに信用してもらわなければなるまい。親鸞自身の宗教生活や家庭生活を見せる必要もある。

それを見て、感動した関東の人びとは、しだいに親鸞に心をひらき、親鸞の説く念仏の教えに耳を傾けるようになったのではないだろうか。そうであっても、親鸞の布教を妨害する人物も現れてくる。山伏弁円べんねんがその一例である。親鸞伝絵せんにんに、

しかるに一人の僧 由伏云々ありて、
動ややすればもすれば仏法に怨うらみをなしつつ、結句害けつこ心を挿さしはさんで、聖人を時々うかがひたてまつる。

けれども一人の僧がいて、かれは山伏だったということだ、なにかにつけて親鸞の布教の邪魔をし、結局親鸞を殺そうとして親鸞の様子をときどきうかがっていた」とあるように、弁円は親鸞を殺害しようとしたのである。

しかし結局弁円の意図は潰つぶえ、稲田草庵において親鸞の門下となり、明法という法名をもらった。その後は熱心な念仏の行者となり、親鸞に先立って亡くなった。その知らせを受けたとき、親鸞はすでに京都に帰っていたが、明法は極楽へ往生したにちがいないと、関東の門弟につきのように書を送った。

明法御房の往生のこと、をどらきまふすにはあらねども、かへすがへすうれしくさふらふ。鹿島・なめかた・奥郡おくぐん、かやうの往生ねがはせたまふひとびとの、みな御よろこびにてさふらふ。

明法房が極楽へ往生したことは当然で、いまさら驚くべきことではないが、あらためて強くうれしく思う。これは常陸国の鹿島郡・行方郡・奥郡の、このようなめでたい極楽往生を願う方たち皆の喜びである」と書き送っている。親鸞が弁円改め明法を高く評価していたことが推測される。

やがて各地に親鸞の弟子が生まれた。その弟子のほとんどは武士であった。その武士を中心にして他の武士や農民を巻き込んだ門徒集団が生まれた。横曾根よこそね 茨城県常総市じょうそうしの性信しょうしんを最初の指導者とする横曾根門徒。高田 栃木県真岡市まがたしの真仏しんぶつや顕智けんちの高田門徒。鹿島 茨城県鉾田市ほらたしの順信じゆんしんの鹿島門徒。ほかに門徒集団が成立していった。

のちに二十四輩と呼ばれた多くの有力門弟も世の中に出た。そのうち、前掲性信が二十四輩第一、真仏が第二、順信が第三とされている。もともと二十四輩の名を一欄にした「二十四輩牒だて」によれば、第一・第二などの番号はついていない。二十四人が列記してあるだけである。ところで親鸞が住んだところは稲田だけではないようである。今日に伝えられているだけでも、稲田草庵のほかに小島草庵おじまの 茨城県下妻市しもつま、大山草庵 茨城県城里町、三谷草庵 栃木県真岡市、その他がある。ただ稲田がもっとも長く住んだところであることは動くまゝい。というのは二十四輩の当初の住所を調べる

と、ほとんど全部が稲田を中心にした半径四十キロ程度の同心円のなかに入ってしまうからである。

人間が一時間に歩くのは四キロから五キロであらう。とすると四十キロなら八時間から十時間、半日の行程である。

つまり、親鸞は朝に稲田草庵を出発する。夕方に門弟の家に着く。夜、集まってきた人たちに念仏の教えを説く、翌朝、稲田草庵に向けて帰る。このような布教活動が推測されるのである。

関東での活動の生活

親鸞は二十年近くも関東の人びとと生活をともにした。関東の人びとの気持ちや願いを膚で実感した。民衆のなかでの生活であった。そのなかで本格的な布教生活を送り、多くの成果をあげた。またこの布教生活のなかで根本的な教書である『教行信証』も完成させた。これらはすべて妻子とともにあった生活のなかの成果であった。

親鸞は家庭人でもあった。妻恵信尼と娘小黒女房、息子の信蓮房たかのせんのほかに、関東で生まれた息子の道性どうしやう、娘の高野禅尼たかのぜん、覚信尼かくしんがいた。家庭生活はいつも楽ではなかったはずである。しかし親鸞は恵信尼とともにその苦勞を乗り越えたのである。

親鸞は関東において民衆仏教をみずから実践し、多くの成果をあげた。それが関東での活動の意義であったということができよう。

稱讚寺 行事予定

二〇二〇年 九月の行事予定

- 六日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 三日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 水 のんのん法話会 午後二時
- 二〇日 日曜礼拝 午後一時
秋季彼岸会
- 一六日 土 親鸞聖人を知ろう 午後二時
- 一七日 日曜礼拝 午前九時

※「不要不急」の外出はお避けください。

迷いの目には

まよめ
しんじつみ
眞実は見ええない

二〇二〇年 心のともしび 九月カレンダーより

二〇二〇年 十月の行事予定

- 四日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日 火 のんのん法話会 午後二時
- 二日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 八日 日曜礼拝 午前九時
- 二五日 日曜礼拝 午後一時
親鸞聖人を知ろう
- 一六日 月 のんのん法話会 午後二時

二〇二〇年 十一月の行事予定

- 一日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 八日 日曜礼拝 午前九時
- 五日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 月 のんのん法話会 午後二時
- 二二日 日曜礼拝 午前九時
- 一六日 木 のんのん法話会 午前九時
- 一九日 日曜礼拝 午後二時
親鸞聖人を知ろう

※毎週日曜日は、日曜礼拝の後、二〇時より書いて味わう会「書道」を開催します。どしどし参加ください。

編集後記

この間、夜遅く、迷惑電話ブロックが表示された電話がありました。恐る恐る取ってみると、〇〇クレジットカード会社ですがキタムラシンヤさんですか」と尋ねますので、余計、怪しく感じながらハイと応えました。そうしたら、不正アクセスがあったようですので、緊急にご連絡しました。アマゾンでナイキの商品や〇〇の商品を購入しましたかと尋ねてきました。身に覚えがないので、イエと応えました。最近アマゾンで購入されたのは、体温計ですかと聴かれましたので、それは確かでしたので、ハイと応えました。誰かが、キタムラ様のカード番号を不正に入手したようですから、今後、アクセス出来ないように番号を変えますので、ご住所を教えてください。新しいカードをお送り致しますと言われました。カード会社から不正アクセスを見抜き、購入を未然に防ぎ、親切に連絡して下さったのに、感謝すべきなのに、連絡してきた方が本当にカード会社の方か不信に思えてきました。そして、慎重にならざることを当方も奨めますので、カードの裏の番号にお電話してくださいと言われ、直ちにかけ直しました。そしたら、またこちらからかけ直しますからと言われるので、いや、家にかけてこられた〇〇さんを出してくださいと申しました。わかりましたということで、待っていたら、違う男の方の声でした。住所の確認をされたので一度断りました。が、正式な番号にこちらから電話したことに気づき、番地を応えて終りました。不信感ばかりが増えていく自分に嫌気がさす夜でした。

二〇二〇年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051